

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第21回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日付：11月28日（火）1日目

大学名：北京大学

氏名：陳晨

この日の昼、代表団が東京に到着し、興奮に満ちた日本での旅が始まった。今回最初に訪問したのはJALの整備工場であった。学生等はスタッフの案内の下、飛行機のメンテナンスの現場を実際に見学し、航空会社における技術や正確性の高さを体感した。また質問を通じて私はJALについて以下の認識が得られた。

はじめに、JALの最大の特徴はサービスの素晴らしさにあるということである。JALのサービスの質は極めて高く、その優れたユーザー体験こそが、正にJALがシェアを獲得する上での最大の武器となっている。素晴らしい機内食や客室乗務員のサービスから、安定した飛行体験、静かな環境まで、これらはいずれもJAL独特のものである。

次に、JALの現在の戦略としては、利益率が高い欧米路線を増やすことで急速な利益の増加を実現している。そのためJALは毎年40機の航空機を購入しているが、安易な新規路線の開拓は行っていない。

三つめに、航空業界といった大規模資産の業界においては、投資を如何に回収するかが重要である。この点においてJALは品質とメンテナンスを重視し、航空機の寿命を30年以上にすることで費用を効果的に分担し、また減価償却費用を下げることで黒字実現の土台としている。

日付：11月28日（火）1日目

大学名：北京師範大学

氏名：李易陽

早朝5時、夜がまだ明けていない頃、私たちは学校から空港へ向けて出発した。そして空港にて団員が集合した後で搭乗手続きを行った。日本人の礼儀正しさについてはかねてより聞いていたが、日本航空のスタッフが頻繁にお辞儀をしているのにはやはり驚かされた。

昼になり私たちは羽田空港に到着し、暫しの休憩の後今回の最初の目的地である日本航空の整備工場の見学を始めた。そこでは機長や客室乗務員の制服の試着のみならず、同社の歴史を紹介する博物館の見学の他、スタッフの詳しい解説を通じボーイングとエアバスの機体の見分け方、飛行機がいかに着陸するか等について一定の理解を得ることができた。また同整備工場における「整理整頓」、「安全第一」の理念についての理解を深めることができた。

そして見学を終えた私たちは飛行機で大阪へ向かい、豪勢なバイキング形式の夕食を楽しんだ後、仲間と共に宿泊先のホテルの近くを散策した。夜の北京の賑やかさとは異なるものの、街路は静かだが活気があり、空を見上げるといくつかの星がかすかに見えた。

初めての日本で、すべてのものに興味がある。明日にも期待している。

日付：11月28日（火）1日目

大学名：北京第二外国語学院

氏名：孫佳濱

今日は「走近日企・感受日本」活動の初日である。日本文化を体感することは私にとって長年の夢であり、日本は国土面積こそ小さいものの、その文化的内包は私たちが学ぶべきものである。私は日本への好奇心を抱きながら代

表団と共に日本航空の整備工場を訪れた。

地下の工場の門を開けると、皆は思わず驚きの声を挙げた。まず工場の面積がテニスコートよりも大きく、大型の航空機が最大3機収容できる。次に同整備工場では設備が整っていた。航空機はとて大きいと、メンテナンスにおける利便性を高めるため、各部位には専用のはしごが配備され、スタッフが作業をする際の安全性と効率を高めている。今回幸いなことに私たちは航空機の着陸の様子を至近距離で観察することができた。また解説スタッフからは飛行時の知識について紹介があり、私たちはそれらに耳を傾けた。そして見学の時間こそ短かったものの、スタッフはとて丁寧に解説をしてくれた。見学を通じ私は、一人の大学生として自分の専攻に関する知識を得るだけでなく、本以外の知識により自身の見識を高めなければならないと感じた。特に日本語を専攻している私にとっては、日本の文化をこれまで以上に知り、感じる必要があると思った。

午後、私たちは慌ただしく飛行機に乗り大阪へ向かった。明日私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターと大阪大学を訪れる。明日は沢山の日本の学生と交流し、日中それぞれの文化に存在する違いを比較するなど日中の民間交流に貢献したいと思っている。そして明日への期待と共にその準備をした。いずれにしても今日は本当にいい勉強になりました。明日の訪問、楽しみにしています。

日 付： 11月28日 (火) 1日目

大学名： 華北電力大学

氏 名： 付康

「ドン」という音と共にJALの飛行機が羽田空港に着陸し、私は日本の地に足を踏み入れ日本文化を体感する旅を始めた。

中国国内のネット上では日本人が細やかで礼儀正しいとよく聞かすが、今日は本当の意味でそれを感じることができた。空港のトイレではビジネスマンがブリーフケースを置けるスペースがあった。こうした一見地味なディテールに私は中国国内ではトイレに入る際は手持ちの鞆を他人に預けなければならないことを思い起こした。ここでまた日本文化のもう一つの特徴について話をしたが、ガイドの紹介にあったように日本では親が子どもに他人に迷惑をかけないように教育する。そのため日本人は日頃から「すみません」という言葉を口にする。

午後は日本航空の整備工場を見学した。バスを降りると整備工場側から温かい歓迎を受け、出迎えのスタッフがバス近くまで迎えに来ていた。また建物内に入る際は常に案内のスタッフがいて、「列を作り歓迎する」様子からは多少古代中国の十里相迎(十里手前から出迎える)といった感覚がした。また作業場に入る際は私たちにヘルメットが配られるなど、安全意識の高さと共に生命への尊重が感じられた。

最後に見学を終えその場を離れる際、整備工場のスタッフは手を振ってお別れをしてくれた。またたとえ面識のない警備員でも、私たちに対してお辞儀をして見送ってくれた。こうした振舞いには心が温かくなる思いがした。

日 付： 11月28日 (火) 1日目

大学名： 国際関係学院

氏 名： 杜文慧

朝、日本航空のJL20便に乗り羽田空港へ向かった。その後日本航空の歴史について深く知り感動した以外に、整備工場の見学では巨大なスチール製の足場や清潔な作業環境に驚かされた。日本航空における航空機のメンテナンスはA・C・Mの3タイプに分かれており、Aは650時間のフライト毎に行うメンテナンス、Cは1ヵ月半に一度行うメンテナンス、Mは5年に一度行う全面的なメンテナンスである。その他航空機には機首・胴体部分・機尾に計3つのエンジンがあり、その中機尾のエンジンは他2つのエンジンへの圧縮空気動力提供用で、客室内の空調や照明用電気の提供も行うことを知った。またボーイングとエアバスの各種機体の見分け方についても知ることができた。さらにスタッフか

らは何故主翼に燃料を蓄えるのか、また3つのエンジンの位置づけといった問題について丁寧な説明があった。

今回の見学を通じて日本航空におけるメンテナンスの実状を知り、同社の整然としたメンテナンスのメカニズムや方法には本当に驚かされた。

日 付： 11月29日（水） 2日目

大学名： 北京大学

氏 名： 高遠

朝の和洋折衷の食事でリフレッシュした後、PETECへ向けて出発した。

これほど有名な日本企業の内部に私は初めて踏み込んだ。思っていた通り活力に満ち、親しみやすさと緻密さが共存した作業場で、また奥深く分かりやすい、そして熱意に満ちたサービスと解説であった。しかしながら私が特に感動したのは、パナソニックの企業としての、また松下幸之助氏の企業家としての社会的責任感であった。責任感や社会的役割のない企業は成功することはなく、名声を得ることは尚のことない。対して松下幸之助氏は1965年にはすでにリサイクルを提唱し「モノを大切にすること」を広めており、今回の見学で見聞きしたことについては本当に感服させられた。

また特筆すべきは、ディテールにより成果をあげている科学技術の応用（原理は簡単だが、それを効率的な選別につなげることは簡単ではない）以外にも、PETECのヒューマニゼーションやヒューマンケアは素晴らしいということである。リサイクル工場であるため、工場における騒音は大きく、作業もきついが、工場ではスタッフのために耳栓、超厚手袋そして革靴などの防護用具を準備している他、さらに作業用具の改良を行うなど、大規模な分解作業における騒音、汚染や危険性を最小限にするための対応を行っている。

昼食は、恐らくこの一年で最も上品であろうと思われる洋食に舌鼓を打った。

午後は待ちに待った大阪大学にやって来た。様々な高さのモダンな建物が並ぶ様子は趣があるが、やはり工業精神が最もはっきり示されていた。特に接合科学研究所では、摩擦攪拌接合の発展ぶり、実験と数学モデルを兼ね備えた材料探求、複数のルートによる分析管理を行う総合実験室、先輩や教授らの細やかな解説、操作、回答など、接合科学研究所のハイテクぶり（世界で唯一の分析設備もあった）のみならず、着実な理工精神が感じられ、感服と同時に憧れを抱いた。

大阪大学の教授は素晴らしく、今回多くを学ぶことができた。また大阪大学の学生らもとても優秀で、懇親会もとても楽しかった。それから都市計画を専攻する学生が最も期待していた新幹線も体験した。

Farewell Osaka ! Hello Nagoya !

日 付： 11月29日（水） 2日目

大学名： 北京師範大学

氏 名： 王月

2日目、私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターへやって来た。

バスを降りる前、すでに私は窓からパナソニックエコテクノロジーセンターのゲート前の自然風景を目にしていた。それはまるで『紅樓夢』において王熙鳳を描写する際の「未見其人、先聞其声（姿を見かけるよりも先に声が聴こえる）」の手法のように、パナソニックエコテクノロジーセンターは見学者が足を踏み入れる前からすでに彼らの企業文化を無言のうちに伝えていた。その後、スタッフの紹介を通じて、私たちは同センターが「商品から商品へ」の理念を堅持し、100%のリサイクルの実現に力を入れ、環境保全事業の発展を推進していることを知った。その他、周辺地区との共生の実現のため、同センターはさらに現地と契約を締結し、環境品質を保証している。一連の紹介の中で私が最も意外だったのは、リサイクルのプロセスにおける消費者の役割や義務であった。中国国内とは違い、日本の消費者は使用

済家電をリサイクルに出す法的義務があるだけでなく、リサイクル業者に一定の費用を支払わなければならない。こうした取り決めは消費者の負担を増やすが、長い目で見れば全人類の権利を守ることに繋がっている。しかし、消費者の負担によりリサイクル業者の利益とする手法は長く続くものではなく、経済的収益により環境保全の効果と利益を賄うことで、真に経済と環境の良好な関係性を実現すべきだと私は思う。

パナソニックエコテクノロジーセンターに別れを告げた私たちは、長きに渡る高い名声を誇る大阪大学へとやって来た。私たちはスタッフの案内の下、摩擦攪拌接合、レーザー接合そして世界で唯一のX線4次元可視化システムを見学した。接合科学研究所で見たものは私の知識の範囲を超えるものであったが、スタッフの分かりやすい解説により私は接合技術について初歩的な理解ができ、自身の知識がより豊富になった。その後、私たちは大阪大学の中国人そして日本人学生と共同で発表を行い、懇親会ではさらに踏み込んだ交流をすることができた。顔を合わせた時間こそ短かったものの、時に互いに笑顔を見せるなどとても楽しく交流することができた。そしてお別れの際は連絡先を交換し合った。彼らとの再会の日を楽しみにしている。

日 付： 11月29日 (水) 2日目

大学名： 北京理工大学

氏 名： 詹天予

朝7時30分に朝食を済ませ、この日の活動が始まった。午前パナソニックエコテクノロジーセンターを訪れた。同社への訪問では多くの収穫が得られた。

同社は「地球環境との共存」を目標とし、「商品から商品へ」の循環を実現している。

ここではまず初めにスタッフから、商品の回収に関する日本の法律について紹介があり、日本では消費者が使用済家電を出す際に費用も納めており、これらは市民の責任そして義務であることを知った。これは中国とは全く異なる状況であり、この政策からは環境への重視の度合を見て取ることができた。次いで、私たちは工場のラインを見学した。そこではスタッフから鉄と非鉄の分離、プラスチックと非鉄金属の分離の方法などについて詳しい紹介があり、科学技術の重要性を感じた。その他、同社では従業員に対して細やかな気配りをしており、年に3回の健康診断を行い、騒音の従業員の聴力への影響などをチェックしている。

午後、私たちは大阪大学を訪れた。ここではまず接合科学研究所を見学した。ここの実験室は私がこれまで学校で目にしたものとは大きく違い、まるで工場のように中には非常に大きな機材があり、より現実の問題に即した実験が行われていた。また教授からは私たちが提起した問題について詳しい回答があり、些細な部分から着手するという考え方を体感することができた。その後の大阪大学の学生とのグループ討論はとても印象深かった。私たちのグループのメンバーは皆中国語ができ、一人は中国から来た教授、もう一人は4歳の時に中国から日本に移り住んだ大学4年生の学生であった。私たちが選んだテーマは工業、経済、環境三者の関係性で、私たちは丁度午前に見学したパナソニックエコテクノロジーセンターが経済や環境の問題についてうまく対処していると思った。この他、私たちはofo、Alipay、ごみの分類、循環経済などについてブレインストーミングを行った。工業がいかに関係面と環境面を両立していくかは常に各国が抱える課題であり、今回の討論会を通じ、私はさらに認識を深めることができた。

日 付： 11月29日 (水) 2日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 張瀟

今日は活動の2日目で午前はパナソニックエコテクノロジーセンターを見学し、午後大阪大学を訪れた。

パナソニックエコテクノロジーセンターでは、スタッフからの紹介により、パナソニックの創始者である松下幸之助氏は1960年代からすでに環境保全とリサイクルについて提起していたことを知った。そして2001年に使用済家電専門の

リサイクルを行うパナソニックエコテクノロジーセンターが完成した。次いで私たちは工場内部において使用済家電のリサイクル過程を実際に見学した。同センターでは主に、洗濯機、冷蔵庫、エアコンそしてテレビのリサイクルが行われている。そして段階的な分解ラインを通じて使用済家電は様々な再利用可能な資源に分類される。同センターを見学するまで、私は家電のリサイクルとは単純な分解を行うものだと思っていたが、リサイクルには複雑な技術や構想が存在することを知った他、パナソニックの自然や人類への責任感に基づく取り組みを感じることができた。こうした技術的な研鑽の精神と企業の社会的責任感については中国の企業も学ぶべきである。

大阪大学では世界トップクラスの技術能力を誇る接合科学研究所を見学した。私は日本語専攻のため、接合技術についての知識はなかったが、研究スタッフから設備や技術原理についての分かりやすい解説があり、私は従来関わりのなかった接合技術について多少の親しみを感じることができた。研究スタッフは私が想像していた「理系男子」のイメージとは違い、人文的な言葉で言えば、彼らは科学技術を頂点まで高めることができ、また一般の人に科学技術の偉大さと素晴らしさを感じさせることができる。

その後私たちは大阪大学の学生とグループ討論を行い、それぞれ討論の成果を発表し合った。日中の大学生生活の違いを比較し、日中のエネルギーと環境保全事業の先行きを研究し、キャリアプランを討論するなど皆の思考が大いに発揮された。この他、私自身ついに日本語を話すことへの恐れという課題を克服し、討論に可能な限り参加できたことはとても嬉しかった。討論終了後、私たちは懇親会に参加し、おしゃべりをしながら夕食を楽しんだ。

夜8時30分、私たちは名古屋に向かう新幹線に乗った。日本の駅の秩序、静けさ、清潔さはとても印象深かった。皆は案内に従い現地の習慣に則り列を作り改札を抜け列車を待った。今回の乗車体験で皆は時間遵守と秩序がもたらす効率の良さを体感した。これらは皆が良い習慣を身に付けるのに役立つかもしれないと思った。

清潔な列車は私たちを乗せ素早く目的地に到着し、こうして2日目の活動が無事終了した。

日 付：11月30日（木）3日目

大学名：北京大学

氏 名：費渝

3日目のこの日は見学が比較的集中していたが、メインは三菱電機の見学であった。三菱の名前は中国でも耳にすることが多く、この日の三菱電機の工場では同社の進んだ技術と理念にとっても衝撃を受けた。

2日目のパナソニックエコテクノロジーセンターの見学では自動化の度合はそれほど高くないと感じたが、この日の三菱電機の工場では日本の工業の自動化の高さが表れていると感じた。同社のロボットは外観の美しさ、動作の精度、稼働の高効率性、スピードの速さなどが一体となっており、日本の高度に発達した技術を示していた。またさらに驚いたのは同社の E-Factory システムで、世界の高度なデータ化の時代背景において、いかに大量のデータを可視化し、それらを分析処理するかは、一企業そして一国家が時代をリードできるかどうかにおいてきわめて重要な要素である。技術レベルを向上すると同時に監督、管理システムの能力を向上する。E-Factoryは工場の生産能力の改善において非常に優秀であり、そのリアルタイムにフィードバックされるプランとシームレスに伝達されるデータにより、従来の工場におけるフィードバックと問題解決における効率の問題を解消し、同時に工場従業員による操作の難易度を大きく軽減している。三菱電機が中国と提携し、メイドインチャイナ2025の推進をすることをとても嬉しく思っている。三菱の先進技術はきっと中国の製造業に新たな活力を注入するであろう。

日 付：11月30日（木）3日目

大学名：北京師範大学

氏 名：尚楚岳

三菱の工場はとても先進的でまた人間本位であった。同社で私が印象深かったのはロボットと人のバランスで、ロ

ボットが完全に人の代わりをするのではなく、人の価値が示されていたことである。例えば組立完了の最後の行程は人が行う。その一つめの理由は人による組立はロボットではできない柔軟性があり、二つめの理由はこうした作業の場合、人の方がより効率的に作業を遂行できるからである。よってロボットの優位性を人が正確にできない部分に活用し、人の能力をロボットがコストパフォーマンス良く代替できない部分に活用する。こうしたロボットと人についての模索とバランスはとても印象深いものがあった。

もう一つ印象深かったのは、昼食会の席上私が日本側の代表者に「盗撮をする人はいますか？」と質問した際に得られた「私たちは見学に来る皆さんを信用している」との回答であった。悪影響も起こり得る強制的な禁止措置を採るのではなく、同社は他人を信頼している。私はこの点にとっても感動した。

夜の箱根のホテルはとても家庭的雰囲気のある場所で、皆は一緒に温泉に浸かり、語らうなど友情を深めるとも良い機会となった。またちょうどこの日あたりから、私は他の団員についてより知ることができた。それから同行のガイドさんや先生そして私たちにこのような機会を提供してくれた各企業には心から感謝している。皆さんのおかげで、自分たちがこうした体験ができています。将来日本を訪れるとしたら、今回のような企業見学の機会はなく、きっと勉強や生活がほとんどであろう。そのため日本のハイテク技術を目にし、優秀な方々と交流できたことはとても得難いことであったと思う。

日 付： 11月30日 (木) 3日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 呂嘉琦

この日見学した企業は三菱電機名古屋製作所の一社だけであった。生産ラインの見学において、私は三菱の「E-Factory」という先進的理念について基本的な理解を得ることができた。「E-Factory」のスマート制御の下、図表やデータを通じ直接工場の各部署の作業進行状況を把握することで人力や物資を大きく節約することができ、工場各部署の照明や空調の制御を通じ、無駄な電力消費を大きく減らすことができる。また質疑応答の際に、三菱電機の「E-Factory」理念は最も早く提唱され権威性もあったが、工作機械やロボット等の面で一部のライバル企業には及ばなかったことを知ったが、私はそうしたハード面よりも理論の方が重要だと思う。理論のサポートがあつてこそ、ライン全体がうまく稼働するのである。設備などのハード面は、その中で作業をするにすぎないのである。設備は少しずつ改良改善できるが、全体的理論の支えがなければ何も始まらないのである。

工場内の生産ラインではそのほとんどの作業をロボットが行っており、一部の複雑でコストの高い作業を人が行っていた。将来的には工場全体として「全自動化」を目指していく。この点について、私は以前に先生から提起された「人工知能は人による通訳・翻訳業務を完全に代行することができるか」という問題を思い起こした。もちろん私の考えは不可能というものである。ロボットの学習能力は人よりも遥かに優れており、大量にデータを記録することができるが、感情がなく、異文化間の微妙な違いを感じるができないため、ぎこちない通訳や翻訳しかできない。しかし工場のラインであれば、私はロボットが完全に代行できると思う。ハイテクそして精密加工の産業にとってもこれは大きな流れだと思う。

昼食そして箱根天成園での夕食はいずれも魚介類がメインの料理であったが、訪日代表団の関係者は常に私を気遣ってその他の料理を準備してくれていた。私自身魚介類が食べられない点が克服できずとても申し訳なく思っている。日本のような「人並み」を重んじる社会において、私は絶えず独立独歩の個人主義をいつている感じがしてとても申し訳なく思うと同時に、関係者の皆さんの私への理解や対応に心より感謝を申し上げます。

日 付： 11月30日 (木) 3日目

大学名： 華北電力大学

氏名：張楠

昨晚新幹線で私たちは名古屋にやって来た。大阪と比べると、名古屋はより現代的な工業都市のような感じがした。しかも夜11時でも街はとても賑わっていた。

今日私たちは三菱電機名古屋製作所を見学した。私は今回見学できたことにとても感謝している。なぜならここは私はずっと憧れていた場所だからである。見学では、担当者から「E-Factory」の理念及び核心技術PLC（シーケンサ）によるスマート化作業とその先行きについて紹介があった。その紹介から、三菱電機名古屋製作所は現在、スマート化、省エネ及び製品デザインの面でますます成熟し、また開放的なプラットフォーム構築に尽力し、さらにメイドインチャイナ2025の実現へのサポートをしていることを知り、私たちが学ぶべきであると同時に感謝すべき存在であると思った。また見学を通じて印象深かったのは、ステーターの生産現場で、私は初めて至近距離でこうした生産ラインや人とロボットの共同作業の現場を目にした。スタッフらの手慣れた動作やデータのリアルタイム表示、厳しい業務環境における日本の生産の質への高い要求及びスタッフらの緻密な仕事への姿勢などには感服せざるを得なかった。しかし残念ながら、多くの製品が展示のみでその原理についての説明はなかった。電気関係を専攻する身として電気機械には非常に興味があるが、実際に関連知識を学べる機会はとても少ない。それでも今回の見学では自分の視野が広がり、特にスマート化やその工場での応用における重要性について改めて認識することができた。

夜、私たちは箱根温泉のホテルに到着し、本格的な日本料理に舌鼓を打ちながら親睦会を楽しんだ。衣装の関係でダンスには参加できなかったが、自分自身代表団のメンバーとこれまで以上に打ち解けることができたと思った。その後私たちは温泉に浸かり、この数日の疲れを癒した。温泉に浸かりながら、私は日本人の長寿の秘訣が分かった気がした。

今日の訪問ではたくさんの収穫があり、関係者の皆さんにはとても感謝している。

日付：11月30日（木）3日目

大学名：国際関係学院

氏名：姚禹

この日の私たちの最初の目的地は、三菱電機名古屋製作所であった。そこではまず初めに三菱電機の鳥居氏からの紹介に耳を傾けた。そして私はこれまで曖昧であった一つの概念についてはっきりと理解することができた。私はこれまで三菱と名の付く企業は一つの超大型の財団企業で、その下に多数の子会社があるのだと思っていたが、紹介を聞いて実際は各企業が独立して互いには何の関係もないことを知った。長年勘違いをしていたことから、この事実には本当に驚かされた。

その後の見学では主にサーボモータの生産ラインと多くの自動化機械を見て回った。三菱電機の自動化機械については高効率、高精度、高速という言葉で形容することができる。現在の世界経済においては、高い生産効率を実現した者の利益が高く競争力も強くなる。またロボットによる自動化生産や高精度は品質の高さを保証する。こうした点もまた三菱電機が業界をリードする要因であろう。この他サーボモータの生産ラインの見学では、多くの段階において人がその作業を遂行していたが、その後の質疑応答においてその理由が判明した。それはこれらの段階の作業では人の方がロボットよりもコストが安く、さらに人の手はロボット以上の柔軟性を有しているため、製品の品質保証がより可能だからである。

午後私たちはバスで箱根へ向かった。道中では富士山の姿をはっきりと目にすることができた。山頂付近の雲は陽の光に照らされピンク色がかっていた。道中の景色を見ながら、日本の森林カバー率の高さと、同時に植生の多様性に感心させられた。これは中国では感じる事のなかったものであり、一刻も早く中国でも見られることを願っている。環境面について、中国は日本に多くを学ぶべきだと思う。

夕刻私たちは山間にある天成園ホテルに到着した。知っての通り日本は衝突帯に位置しているため大量の温泉資源がある。この日は実際に日本の温泉文化を体験し、また他校のメンバーとも楽しい交流をすることができた。

日 付：12月1日（金）4日目

大学名： 北京大学

氏 名： 劉瑞

午前の移動を経て私たちは東京に到着し、品川プリンスホテルで中国っぽくない「中華料理」を食べた後、NECの見学に向かった。同社は従業員10万人規模の大企業である。私たちは同社のイノベーションワールド内の画像認証技術について見学をした。話によるとこの技術については世界一とのことで、さらにスマート都市におけるソリューションを含む多数の製品があり、それらがメキシコやアルゼンチン等の国で都市の犯罪率の低下に役立っているとのことである。

しかし私にとって最も印象深かったのは同社の技術であり、また「Orchestrating a Brighter World」の概念そして優れた接待プランであった。日本での訪問先企業にはいずれも、効率的で魅力的な見学を実現する優れた接待プランを有しているという特徴がある。こうした角度から、日本企業は学習、教育、継承を重視していることが分かる。NECの接待プランは非常に優れていた、こうした点は非常に印象深かった。

そして丸紅で行われた「懇親会」もとても素晴らしかった。私たちは丸紅のスタッフから色々なことを教わり、世界における今後の発展の方向性や世界の変化、貿易のデジタル化、経済のデジタル化、人工知能の発展速度など多くの話題について語り合うなど真の意味で互いに楽しく「交流」ができ、自分自身とても励みになった。そしてこれまで以上に学問に打ち込み、自らの欠点や不足した部分を知らなければならぬと思った。

他者から学ぶべきところはまだまだ多く、真剣な姿勢、真面目さ、責任感、寛容さを身に付けるためにはまだ先は長い。私たちはより成長し、より良い環境そしてより良い世界を作るために頑張っていかなければならない。

日 付：12月1日（金）4日目

大学名： 北京理工大学

氏 名： 汪俊呈

この日私たちはホテルを出発してから午前の移動を経てお昼に東京へ到着した。そして美味しい昼食の後NECイノベーションワールドの訪問へと向かった。NECは顔認証技術に長けており、私たちは同社の顔認証技術、さらに同社の将来的な技術の発展の方向性について理解を深めた。

イノベーションワールド内に入ると、まず案内スタッフからプレミアムジャーニーに案内された。そこでは顔認証技術を活用した空港でのセキュリティチェック、チケット照合の全自動化について見学した。またジェスチャー認証によりテーブルでのスマート注文も実現可能とのことで、この機能には私自身とても驚かされた。なぜなら中国国内における関連の技術は進んでおらず、顔認証の正確度も不十分で、ジェスチャー認証についても早急に普及させる必要があるからであり、またNECがこれほどの先進技術を実用化させることは非常に素晴らしいことだからである。その後スタッフからは集団における受動認証について紹介があり、この技術により迷子の親御さんを素早く見つけることができ、且つ正確度が極めて高いなど、こうした点から私はNECの顔認証技術は世界一の実力を有しているのだと改めて確信した。

その後訪れた丸紅でも私は視野を広げることができた。日本の大型総合商社である丸紅の事業内容は、インフラ建設からエネルギー供給そして食品の輸出入など幅広く、国際的な提携も緊密で日本経済の発展や国際貿易提携の強化に突出した貢献をしている。私は工業を専攻しているため大型商社の運営モデルについてはあまり詳しくないが、分かりやすい解説スタッフからの紹介を通じ丸紅について基本的な理解をすることができ、それと同時に同社が今日まで積み上げた業績について心から感服させられた。

日 付：12月1日（金）4日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏名：徐穎

早朝の箱根の空気は、何の不純物もないくらいにとっても澄んでいて、下駄を履いて外出し、鴨や魚に餌をやっているおじいさんに「こんにちは」と挨拶をすると、おじいさんも笑顔で「こんにちは」と挨拶をしてくれた。そして私はこの比類ない自然の美しさをカメラに収めた。

昨晚の温泉のおかげで、今日はリラックスした状態で企業訪問の旅を再開した。

午後の最初の訪問地はNECであった。解説スタッフの案内の下私たちは「未来の科学技術」を体験した。NECは世界をリードする顔認証技術を有しており、この技術が生活のあらゆる面で応用されると、私たちの生活の質はさらに高まり、リズムもより速くなる。そして私が驚いたのは、同社は物体の表面の凹凸により物体を認証することができる。例えば、形や大きさ、ねじ山が完全に同じねじでも見分けることができる。その他、NECは様々な国において認証技術を実用化しており、アルゼンチンの某都市では犯罪率が80%下がったという。しかしながらNECの同技術が成熟すると同時に、私も未来の人類について心配せずにはいられなくなった。解説スタッフが手のひらサイズ以下の翻訳機を持ちながら解説している様子を見て、私自身、自分の将来が心配になった。もし翻訳機の精度が人と同じレベルになった場合、人々はコストの高い人による翻訳を必要としなくなるだろう。

二つめの訪問地は丸紅株式会社であった。李雪蓮女史から詳しい紹介があり、沢山の専門知識に話が及びあまりよく分からなかったが、質疑応答の際に多少理解することができた。そして、その後の懇親会において李女史が私たちとおしゃべりした際に、私たちがあまりよく分からなかった部分が多かった旨を伝えたところ、彼女は笑いながら「あと十年もすればあなたたちもこうした話をできるようになる」と言っていた。丸紅のスタッフである松田氏からも多くの疑問への回答を頂いた。またその間は全て日本語で交流をしたため、自分の日本語会話の鍛錬にもなった。

日付：12月1日（金）4日目**大学名：国際関係学院****氏名：辺嘉禾**

この日ついに東京に到着した。かつて私の生活において映画やドラマでしか登場してこなかった東京というこの場所は、私が想像していた通り高層ビルが立ち並び、人が多く賑やかで、道行く人は忙しそうにしていた。しかし私たちが最初に訪れたNECでは心温まる体験をした。まず同社の顔認証と画像認証技術である。空港などでいかに安全性を保障した中で各審査の快適性やスピードを高めるのか。NECの高速通関ゲートはこの点を実現している。同製品のキーワードは「顔の特徴を把握する」ことであり、そのためたとえマスクや眼鏡を着けていても、同製品は問題なく使用することができる。アメリカやブラジルの空港で使用した際、比較の成功率は100%であった。プレミアムジャーニーではさらに年齢に基づき表示する広告を変えるスマートシステム、笑顔の度合を測定し顧客の商品への満足度を推測する機械など多くの目新しいものを見かけた。これらは将来的に市場に出回る製品で、これらの発明の目的は人々の生活の利便性を高めるという一点に集約される。NECはこの点をとても重視しており、中国の企業も同社に倣い、私たちの生活をより豊かにしてほしいと思う。

丸紅では講座形式で同社の事業内容や経営状況等についての紹介を受け、私はこれまで名前は知っていたがその他は謎に包まれていた同社について知ることができた。懇親会では丸紅の日本人・中国人従業員、また講座の担当者と様々な話をした。卒業後に日本企業に就職するかどうかについては皆の意見が分かれるが、それでも楽しい話し合いをすることができた。小異を残して大同を求めるとは、恐らくこういうことなのだろう。

日付：12月2日（土）5日目**大学名：北京大学****氏名：李暢暢**

私のホストファミリーは東京の郊外に住んでいて、家の中の神棚からは日本の伝統文化が感じられ、庭には小さな橋と池、錦鯉があり、調和がとれた安らかな雰囲気を感じていた。これには日本の中流家庭の実際の生活の有り様が感じられた。彼らは皆親切で礼儀正しく、またとても思いやりがあった。そして昔からの男性は外、女性は内という構成であった。ホストファザーは夜遅くに仕事が終わるがそれでもとても活気に満ちていて、これには偉大なメイドインジャパンを連想させられた。正にこうした無数の日本人家庭の努力によりメイドインジャパンは成り立っており、菊と刀そして匠の心が見事に融合している。

明治神宮の見学では、明治天皇の生涯を振り返りながら、明治維新において日本は欧米列強へ立ち向かい、和魂洋才の思想によりアジアにおける近代化の先駆けとなったが、その当時中国の洋務運動は挫折し、近代化への動きは多くの問題を抱え、後の改革開放によりやっと経済が発展したことを思い、この点について多くのことを考えさせられた。

日付：12月2日（土）5日目

大学名：北京師範大学

氏名：席靖毅

美貴さんが迎えに来た時にはすでに7～8名の団員が出発していた。

エレベーターの中で彼女は私がどこに行きたいか聞いてきたので、私は鎌倉に行きたいと答え、大丈夫かどうか、また遠くはないかと聞いたところ、「近くはないけど一緒に行こう！電車で1時間ちょっとかかる。」と答えてくれた。

電車の中で彼女は私がなぜ鎌倉に行きたいのか、お寺が見たいのかと聞いてきたので、私は興奮しながら鎌倉高校前の踏切で写真が撮りたい、そこはスラムダンクの桜木花道が立っていた場所で、その一帯の海は流川楓が毎朝バスケットボールを背に自転車で通っていた場所だと答えた。

流川楓を無邪気に好きだった高校生の当時、私は彼が生活していた場所を訪れることができるとは思っていませんでした。

その後1時間ちょっと経過して、鎌倉高校前駅踏切で写真を撮り、海辺を散策した。

帰りの電車の中で私はラーメンが食べたいと伝え、私たちは東京駅で降り、その後JUMPSHOPで沢山買い物しました。

ラーメン屋では彼女は私に好きなラーメンを選ばせた後、コーラも注文してくれた。コーラについてはそれまでに話をしていた。

それから16時に彼女の中国語のレッスンに同行した。彼女は毎週土曜の午後にそこで中国語を学んでいるようで、1クラスわずか10人で、高校生からおじいさんまで様々であった。先生からは学生の皆の発音の矯正を頼まれ、授業終了後にはあるおばさんから感謝のしるしとして飲み物を頂いた。先生からも本を二冊頂き、一冊は学生の作成物で、もう一冊は教材であった。将来もし中国語を教える機会がある場合は、この教材が参考になるとのお話であった。

その後一緒に帰宅した。

彼女の家は二階にあり、一階は彼女の弟さんが経営するレストランであった。夕食の際、ホストファザーはテレビでニュースを見ようとしていたが、私がアニメ好きと知り、すぐにチャンネルをコナンに変えてくれた。

夕食を終え東京タワーを見に行く際、ホストマザーはわざわざ私のためにマフラーを用意してくれた。またホストファザーは私がカイロを知らない(実はその時はカイロという日本語が分からなかった)と聞き、北京は東京よりも寒いからと沢山のカイロを私にくれた。

東京タワーの250mの展望台は整備中だったが、150mの高さから見る東京の夜景もとても幻想的で美しかった。

東京タワーを離れる際、1階のワンピースのグッズショップで写真を撮った。

「今日の日付も入れて写真撮ればいいよ。」

「ここに座って撮っても大丈夫？」

「大丈夫、ええ？」

「ここに座って撮りたい！」

「あー、大丈夫！」

夜間のホストファミリー宅一帯はとても静かであった。私たちはずっとおしゃべりをし、彼女は私と沢山おしゃべりをしてくれた。

私は彼女のことがとても好きである。次の日の朝は私を連れて相撲部屋や清澄庭園を見学し、また私が庭園内の松尾芭蕉碑の前で授業の際に習った俳句の話をしたこともあり、芭蕉記念館にも行った。

帰りの際は彼女の前で涙してしまった。この2日間親切にしてくれて、別れがとても名残惜しかった。

日 付： 12月2日（土）5日目

大学名： 北京師範大学

氏 名： 賈羽飛

この日の朝、皆は朝食を済ませた後、ロビーでホストファミリーの出迎えを待った。その様子はまるで子供が放課後に家族の出迎えを待つかのようで、私もその中の一人であった。ホストファミリーが次々と入ってきて、私は彼らの登場への期待に胸が膨らんだ。私は早くに出迎えを受けた。事前に彼らの写真を見ていたので、彼らが入ってきたときは嬉しさの余り椅子から跳び上がってしまった。

ホテルを離れるとすぐに重山さんが私の荷物を持つと言ってくれた。この時私は、彼らの娘になったような気がした。その後私たちは車で重山さんと一旦別れ、私は直美さんと一緒に東京タワーや浅草寺を訪れた。その道すがら私は、人生初の日本訪問だから日本の美しい着物を着たら意義深いだろうと考え、着物を着ることになった。その後直美さんは駅近くで着物を試着できる店を見つけ、そこで私が試着している際に直美さんはずっと店の人に私が中国から来た大学生でとても優秀だという話をしていた。彼女の自慢げな様子を見て私は、彼女は心から私を歓迎してくれているのだと思った。その後直美さんとほぼ同世代の何人かの女性と顔を合わせたか、彼女等もまた直美さんに私への称賛の言葉をかけていた。これには日本では赤の他人でも外国人である私に親切にしてくれるのだと感じた。その後浅草寺で写真を撮ったが、直美さんは本当に私の写真を撮るのが好きなようで道中は常に写真を撮り、私の楽しい瞬間を全て残そうとしてくれていた。

電車の中では直美さんは疲れから眠そうにしていた。これには疲れているにもかかわらず彼女は私の行きたい場所や体験したい事など様々な願いを可能な限り実現しようとしてくれていたのが分かった。東京タワーでは記念品の買い物にも付き添ってくれて、さらにワンピースのグッズショップで写真も撮った。

重山さん宅に到着し一歩足を踏み入れると、そこにはこれまでの走近日企に参加した中国人学生からのプレゼント（北京オリンピックのマスコットや中国結等）が飾られていた。夕食は直美さんの旦那さんが作った和食だった。その夜は重山さん宅で彼らが世界各地を旅した際の写真を見た。彼らはすでに世界のたくさんの地方を訪れていて、様々な体験をしている他、マイカー旅行も好きで北海道等も旅している。

翌日は重山さんが自宅近くの海までバイクで私を連れて行ってくれた。出発の前、直美さんは私が風邪を引かないようわざわざズボンやマフラーを準備してくれた。母親のように優しかった。（前日、彼女の家でシャンプーをした後、髪が濡れているのを見かけた彼女は風邪を引かないかと気に掛けてくれた。）

バイクに乗る際、重山さんは、もし私が携帯電話を使うなら指先の出た手袋を使い、もし携帯電話を使わないなら指を覆った手袋を使うよう声を掛けてくれた。私は、彼らは本当に私の気持ちを尊重してくれていると思った。

お昼は彼らと一緒に中華料理を食べ、その後三人一緒にプリクラを撮ったりお土産を買ったりした。道中は常に重山さんが荷物を持ってきて、それはまるで父親が娘の登校に付き添うかのようで、そうこうしているうちに東京に到着した。そしてお別れ前のお茶をした後、私をホテルまで送り届けてくれた。彼らはそこで先生方とも挨拶を交わし、最後に私の手を取り来年また日本に来てねと声を掛け、私はそれに「はい」と答えた。

全てがあつという間で、私がしっかりお別れをしなければと思った時には彼らはすでにドアの向こうに消えていた。ホテルに戻った私は、なぜしっかりお別れができなかったのかと涙が溢れた。

重山さんや直美さんは当初私のことをゆふえちゃん(中国語の名前の発音をもじったもの)と呼んでいたが、ふえが発音しにくいことから、彼らは私をゆちちゃんと呼んでいた。今でも私の頭の中は彼らのゆちちゃん、ゆちちゃん・・・という声で一杯になっている。

日 付：12月2日(土) 5日目

大学名：北京理工大学

氏 名：王天竹

ついにホームステイの日がやって来た！数週間前からホストファミリーの「妹」とラインを交換し色々な話をしていたので、すでにとっても馴染みがあった。

朝、ホールで並んで座っている時、まるで自分たちが「養子」にもられる子どものようにだと冗談を言い合っていた。だが「お父さん」は私が5番目に「養子」となったことをはっきり覚えていた、これには私は思いも寄らなかった。ホストファミリーと初めて対面し、すべての不安は一瞬にして消えた。まるで長年の知り合いのような感じがした。

1時間半ほど電車に乗り小田原(全団員の中で恐らく一番遠い場所でのホームステイ)に到着したが、突然電車酔いになってしまった。お昼にラーメンを食べる際、私は日本人が食べ物を無駄にしないことを知っていたので、我慢してそのラーメンを食べ切ろうとしたが、「お父さんとお母さん」は私の具合が悪いことを察知し、無理して食べなくても大丈夫だと声を掛けてくれた。その後ホストファミリー宅に到着するとまず私を休ませてくれた。この時私はとても感動し、まるで自分の家に戻ったかのようであった。

ここまで書いて私は出来事だけを羅列して書いていることに気が付いた。しかしそれは書きたいことが多すぎて、またあまりに印象深かったからだと思う。小田原はドラえもんやのび太が住んでいる場所にとっても良く似ていて、まるで自分がアニメの世界に入ったかのようであった。緑の田畑、こじんまりとした家、自転車でダム近くを走り、手にはどら焼きを一つ、遠くには山が連なり、陽の光が山の間から見える。その瞬間、私は「お父さん」の夢がなぜここで家を持つことで、東京に住むことではないのかを理解することができた。日本の田舎は同じ田舎とは言え中国の農村とは大きく異なっている。この清潔さ、快適さ、温もり、便利さは忘れることができない。

私たち「一家」がテーブルを囲むと、床も暖かく、心も温かくなった。

日 付：12月2日(土) 5日目

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：徐穎

朝、私たちは父母の出迎えを待つ子どものようにホールで座り、ホストファミリーとの対面の情景を思い描いていた。実はその前にちょっとしたエピソードが生まれた。朝食を済ませ友人とお手洗いに行ったのだが、その後携帯電話が見当たらなくなり、レストランに置いてきたと思い、ウェイターに話をし、彼らはすぐに探してくれたのだがレストラン内には無かった。その後私はお手洗いで自分の携帯電話を見つけ、すぐにウェイターに伝えたところ、彼はとても優しく「よかった、気をつけてね」と声を掛けてくれた。その瞬間、私はとても温かい気持ちになった。

ホストファミリーが次々と会場に到着し、男の子と女の子が入ってきたのを見かけた時、私のホストファミリーがやって来たと分かった。なぜなら事前に澄川さんからお子さんの写真を見せてもらっていたからである。こうして私のホームステイが始まった。

澄川さんはまず地下鉄に私を案内してくれた。切符の買い方から改札の通り方まで丁寧に教えてもらい、お子さんからも傍で教わった。それから私たちは有名などら焼きを食べ、温かい紅茶を飲み、その後とある変わったお店に向

かった。そこでは着物を身に着けたイタリア出身の店員に案内され、和風の特徴的な店をまわり、店員の紹介を聞きながら伝統的な食べ物などを試食した。午後はデパートに行き、ドーナツを食べミルクティーを飲んだりした。子供たちが遊んでいる間、私は澄川さんと奥さんと一緒に沢山おしゃべりをした。その際彼らは話すスピードを抑えて、私がかからないことについては分かるまで何度も解説してくれた。

澄川さん宅に戻った後、澄川さんと奥さんはたこ焼きを作ってくれた。このたこ焼きは私がこれまで食べた中で一番美味しかった。またお子さんから食べ方を教わった。その後お子さんたちはピアノの練習をした。それから私たちは一緒に本を読み、ゲームをしたりした。奥さんはわざわざ和室の寝床を作ってくれた。澄川さんは、かつて中国において中国人の世話になったことがあることから、その恩返しをしているとのことで、私は彼が受け入れた6人目の中国人学生とのことであった。

私は、彼らとのお別れがきつと辛くなると思った。

日付：12月2日（土）5日目

大学名：華北電力大学

氏名：蒲曾鑫

朝、東京の美しい陽の光を浴び、温かな夢路から幻想的な大都市へと徐々に意識が移った。ホテルニューオータニの高層階の客室において東京の朝から盛大な歓迎を受けたような、また信じられないような感覚がした。

午前9時、私たちは準備を整え、各ホストファミリーからの出迎えを待った。この時間はとても面白く、中国におけるテスト直前の時のように、ホストファミリーとの面会に備え、どきどきしながら覚えてたの日本語を練習していた。

私のホストファザーはHayatoと言ひ、この日は彼が迎えに来た。丁度年に数日の皇居の一般公開日だったため、私たちはとても貴重な見学をすることができた。皇居はお城のようで、内部はとても静かで、建物は簡素、清潔でさらに古風であった。

道中、私はその場で歴史的観光地を見に行くことを決め、ホストファザーはそれらの場所の歴史的意味合いを紹介し、私が理解したかどうか確認をしてくれた。私は参禅といった行為は必要なく、ただ見てみたいと伝え、いくつかの場所を見て回り、私は彼に敏感な問題に触れない程度に多少知りたいと伝えた時にもHayatoさんは理解を示してくれた。

次いで私たちは銀座や浅草寺を見て回り、そしてHayatoさん宅に戻った。夕食はたこ焼きがメインだった。私たちの意思疎通は想像していたよりもスムーズだった。私の日本語は拙かったが、互いの努力でそれらの障壁を乗り越え、私たちは日中の教育の違いや大学生活等について沢山おしゃべりをした。またHayatoさんの娘さんのKanamiさんは現在高校生とのことで、私は彼女に《赤壁の戦い》について解説をした。こうした感覚はとても素晴らしいものであった。

日付：12月2日（土）5日目

大学名：国際関係学院

氏名：賈蘇元

机のある場所が寒かったので、ホームステイが終わりホテルに戻ってから5日目の感想を書いている。

この日は天気がとても良く、私たちは4万歩以上歩いた。ホストマザーの宋さんには赤ちゃんがいるため、私たちは早めにホストファミリー宅に戻った。

日中、私たちは浅草に行き、そこでは大吉を引いた。その後東京スカイツリーに行った。スカイツリーはとても高かった。私たちは色んな場所を歩き、また色んな話をした。受講している授業から道路になぜゴミ箱がないのか、大学入試から中産階級までと、一見何の関連もない話だが、それでも私たちは不思議なほどおしゃべりを続けることができた。

その日の夜、私たち3人はソファに座り、テレビを見ながら雑談をした。
私が普段家にいる時と同じであった。

日 付：12月3日（日）6日目

大学名：北京大学

氏 名：費渝

ホームステイ2日目。

今日はJohnさん宅での二日目で、マンション近くでサンドイッチを食べてからこの日の活動を始めた。

日中の予定は浅草寺、東京スカイツリーそして銀座であった。浅草寺を選んだ理由は、日本に来る前から浅草寺について耳にしたことがあったからだが、実際にそこを訪れると想像していたのとは多少違って、その沢山の人だかりや商業化された街並みは成都の寛窄巷子や北京の南鑼鼓巷を思い起こさせた。観光地として過度に開発され、商業的雰囲気が通り全体に満ちていて、寺院や神社特有の静けさや神聖さはほとんど感じられなかった。一方、前日に東京タワーへ向かう途中に通りがかった小さな神社にはそうしたものが感じられた。ホストファミリーからのお話によって私は、日本には八百万の神という観念があることを知った。これは中国でいうところの万物には神が存在するというものと似ている。何気ない道路に設置された階段が高台に通じ、そこにある誰一人いない神社からは荘厳で神秘的なものを感じた。ホストマザーの中小司さんから水を使った参拝の作法を教わり、そして願いをかけた。私の願いを叶えてくれるだろうか。

浅草寺の後はスカイツリーに行った。スカイツリーは浅草寺からさほど遠くなく、東京で最も高い高層タワーを至近距離で見た時はとても衝撃的だった。ただ、そこは人が多く、チケット代も高かったので上層階に行くことは諦めた。午後は銀座で少し買い物をして、長い間買いたかった傘やアシックスの新製品の靴を手に入れることができた。Johnさん一家とお別れした後、夜には他の団員と一蘭へラーメンを食べに行った。一時間近く並んだが、食べた後には並んだ甲斐があったと思った。

日 付：12月3日（日）6日目

大学名：北京師範大学

氏 名：王月

西山さんから早めに休むよう言われたおかげで、ホームステイの二日目は早くに目を覚ますことができた。西山夫人は豪勢な朝食を準備してくれて、私たち三人は食事をしながらテレビを見るなど、家庭生活の雰囲気を体験した。

9時半に私たちは地下鉄に乗り浅草寺へ向かった。西山さん曰く、日本に来て浅草寺に行かなければ日本に来たとは言えないとのことであった。これには北京に来たら故宮へ行かなければならないというのに近いものがあった。浅草寺に到着後、目に映り込んだのは辺り一面の賑やかさで、そこには外国人観光客が沢山いた。雷門をくぐると、西山さんはおみくじを引かせてくれた。幸運にも私は大吉を引くことができた。それを見た西山さんはとても嬉しそうに、おみくじの内容を中国語で説明してくれた。

私は日本の古本屋に行きたかったため、西山さんは午後私を秋葉原のブックオフへ連れて行ってくれた。ブックオフには沢山のフロアがあり、あらゆるタイプの書籍が置かれ、作家の名前の順番で商品が並んでいた。私は何冊か手に取ってみて、日本の古本は価格がとても安く、本自体も8割方新品に近い状態だと思った。中国にもこうした優れた古本市場が現れ、書籍のリサイクル利用が実現することを願っている。

ホームステイの時間はあっという間で、夕刻にはホテルへと戻らなければならなかった。西山さんは若者の私が渋谷といった若者の街へ行かないのはもったいないと思い、私を渋谷へ連れて行ってくれた。買い物をする時間は無かったが、久しく耳にしていた忠犬ハチ公像を見ることができて、とても満足だった。

ホテルへ戻る地下鉄の中で、私は多くの方が読書をしているのに気が付いた。しかも皆がブックカバーをし、読書の動作もとても丁寧だった。私は日本人のこうした書籍を大切にすることが、正に古本屋の大規模化を実現する要因の一つになっていると思った。

日 付： 12月3日（日）6日目

大学名： 北京理工大学

氏 名： 丁楷軒

さよならを口にした瞬間、様々な思いが混じり、涙を抑えるために私は素早く後ろを振り向き静かに顔を上げた。

この二日間の感想をまとめるとしたら、それは感動、感謝そして感激である。

感動。それは日本に来る前から始まっていた。おかあさんは中国語で1000文字以上のメールを私に送り、彼ら菊地さん一家の状況や彼らの中国との縁について紹介してくれた。長男の貴之さんは数少ない中国語を学ぶことができる高校を卒業し、さらに中国人のガールフレンドがいて、二男は中国の国宝のパンダから名前を付けるなど、菊地さん一家と中国はとても深い縁で結ばれていた。

感謝。彼らにとって全く面識のない外国人である私は、今回彼らから本当の家族の一員として扱われるとは思ってもしなかったが、菊地さん一家は私に本当に良くしてくれ、それは私自身が申し訳なく思うほどであった。お別れに記念写真を撮る際、おかあさんの「家族一緒に写真を撮ろう」の一言は、忘れることのできないものであった。私は心から菊地さん一家に感謝している。

感激。菊地さん一家のみならず、今回の訪日活動に携わった日中経済協会や中日友好協会、そして協賛の各日本企業に対して、間近で日本を体験し、日本を感じる機会を提供してくれたことに感謝している。百聞は一見に如かず、書籍上の知識には限界があり、本質を知るには自ら実践しなければならない。私は日本での体験をありのままに周囲の人へ伝えたいと思う。

ありがとう！

日 付： 12月3日（日）6日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 馬惠琳

今日はホストファミリーやホストマザーと一緒に沢山の場所を巡った。朝食後、子供たちとおしゃべりをしたが、日本の子どもは中国の子どもより素直で可愛いと思った。彼らの目を通じて親切さと多少のはにかみ、そして礼儀正しさが伝わってきた。彼らからはジェンガの遊び方を教わった。日本、特に私のホストファミリーでは子どもへの教育がとても工夫されていた。子供たちが好きなゲームは頭脳が鍛えられるもので、ゲーム自体は難しいが子供たちはそれが好きで、大人でも楽しく遊べるものである。

今日は東京スカイツリーと浅草寺に連れて行ってもらった。昨日の夜、ちょうど東京で最も有名な観光スポットの1位が浅草寺で、2位がスカイツリーとの内容を見ていた。実際にそれらの場所を訪れ、浅草寺やスカイツリーは流石に外国人が好む観光スポットだと思った。この日は天気がとても良く、スカイツリー内部の見学ルートはとても合理的で、沢山の有名なオリンピック競技施設や両国国技館等を見ることができた。浅草寺は人がとても多く、周辺には特徴的な軽食やお土産などが売られていた。浅草寺の建物はとても雄大で、赤と緑が交わり、静けさと情熱といった二つの異なる雰囲気共存したような感覚で、それは実際に目にしなければ分からないものであった。東京で最も古い寺である浅草寺は独特の魅力があった。しかし私が柏村さんに多くの外国人がこれらの場所を好んでいることへの意見を尋ねたところ、彼は浅草寺や東京スカイツリーには特別なところはなく、とても綺麗ではあるが、これらの場所がなぜ外国人に人気があるのか分からないと言っていた。

この他私たちは、企業や仕事、学校や学習、子供の教育等多方面の話題について意見を交わした。その中には、中国人の観念として日本もきっと同じだろうと思っていた事が実際はそうではなかったという事もあった。だからこそ、些細な点における交流でも意義深いものがあると言える。

日 付： 12月3日（日） 6日目

大学名： 華北電力大学

氏 名： 藍文鴻

今日は影山さん一家と過ごす二日目でもたまた最終日であった。ホームステイの時間はあっという間だった。東京タワーや浅草寺を巡った後、影山さんはわざわざ私を皇居に案内し、日本の歴史や徳川幕府による数百年の江戸（東京）統治、その後の明治維新、遷都等の興味深い出来事について紹介してくれた。私は自身の知識が深まったと同時に、影山さんの歴史の知識は素晴らしく、日本の基礎教育はとてもしっかりしていると思った。しかも今朝起床した際に、まさこさんの旦那さんへの気配りや家庭を重んじる態度が感じられた。日本という国は実際には非常に伝統的な家庭を重んじる観念の上に成り立っていると思った。私は現在の欧米を主とする離婚主義や独身主義よりも、日本の伝統的な家庭といったものの方が文化の維持や継承に適していると思う。私は民族の繁栄により有利な日本の伝統的観念や家庭理念に賛同している。

この他、皇居の日本における崇高な位置付けや天皇陛下の日本のシンボルとしての位置付けについて知ることができた。丁度昨日、NHKのニュースで天皇陛下の退位についての報道がされていた。これには影山さんも驚いた様子で、以前の昭和や現在の平成の繁栄時期に思いを馳せていた。

この二日間の影山さんとの交流を通じ、私自身彼の学識や経験の豊かさを知り、さらに沢山の収穫が得られた。ありがとう影山さんそしてまさこさん！

日 付： 12月3日（日） 6日目

大学名： 国際関係学院

氏 名： 辺嘉禾

「一、二、三・・・」朦朧とした中、誰かが日本語で物を数えている声が聴こえ、ベッドから起き、階段を上がりドアを開けると、そこでは娘さんが日課の数学の勉強をしていた。ホストマザーは申し訳なさそうに私の睡眠を妨げてしまったか尋ねてきた。これは私の東京でのホームステイの二日目の始まりであった。驚いたのは、昨晚は和食だったのに、この日の朝は完全な洋食だったことである。共通点と言えば、あっさりした味付けで、野菜も多かった。これこそが日本人が一般的に体型を維持できている理由の一つなのだろうと思った。

ホストファミリーと一緒にバスや電車に乗り街を歩くといった事は今回の訪日団に入る前には想像もしたことが無かった。しかしそれは確かに実現し、私もそれを心から楽しんでた。佐田さんの奥さんとお土産の相談をしたり、娘さんと同じイチゴクレープを分け合ったり、たとえ言葉だけでは相手の意志を完全には理解できないとしても、私は彼らが心から私と交流していることを感じていた。

かつての私の考え方では、彼らがなぜ私にこれほど良くしてくれるのか分からなかっただろう。だが今では、両国関係の好転への願いの一種の表れなのではないかと思っている。

竹下通りは授業で習ったとおり、人がとても多く、素敵な商品が店の外にまで並べられていて、またそれらがスペースの節約のため何段にも積み上げられ、人形のようなメイクをした女の子たちがピンクのマフラーを指差しておしゃべりをしていた。この時私はまるで漫画の世界に足を踏み入れた感覚がして、ホストファミリーの娘さんの小さな手を握りながら時間が止まってほしいと思った。しかし楽しい時間はあっという間に過ぎ、ホテルでお別れをする際、娘さんは私のかぼんの猫のアクセサリーに向かってまたねと言った。猫のアクセサリーは沢山あるが、私には彼らと再会できる機

会はあるだろうか。

日 付：12月4日（月）7日目

大学名：北京師範大学

氏 名：尚楚岳

今日はスケジュールが最も詰まっていた一日だった。幸い、前日までのホームステイで休息をとることができていた。

みずほ銀行や松本楼ではいずれも時間の圧迫感を感じた。銀行側の解説担当者が二回続けて私たちに「いかがでしょうか」と訊ねてくれたが、私は実を言うと彼らともしっかりとたくさん交流をしたかった。私は彼らと交流をし、彼らのような優秀な人々に会えたことへの嬉しさや沢山の素晴らしい企業を見学できたことの喜びを伝えたかったが、時間の都合でそれは叶わなかった。

松本楼でも同様で、お話の内容はとても興味深く、孫中山氏に関する情報を知り、日中の友好を感じ、とても素晴らしいと思った。そしてお話の最後の「日中両国がこのように友好関係を継続してほしい」の一言は、本当に私の胸を打つものであった。私たちの願いはまさにこのとおりである。

大使館では、中国人の日本語学習者として日本に来たからにはここを訪れなければならないと感じた。活動そのものは多少物足りなかったが、その他の企業と比べてもやはり帰属感が感じられた。

訪日前の面接の際に私は日本の大学について知りたいという話をした。そしてこの日は今回の訪日で二つめの大学との交流があり、期待に胸が膨らんだ。大阪大学や中央大学は国立、私立の大学の中でも優秀な大学で、これらの学生との交流では言語能力が鍛えられる他、自分の思想や思考能力も高まり、とても多くの収穫が得られた。

明日には帰国となるが、今でも今回の旅が終わることへの実感が無い。旅や学習の過程はとても楽しく、多くの人が体験できないようなこうした機会が得られたのは本当に嬉しかった。今回経験した様々な事への印象は時間と共に薄れるかもしれないが、その場所に思いを馳せればきっと特定の人や物事、そして経験や言葉などが思い出されるであろう。

日 付：12月4日（月）7日目

大学名：北京理工大学

氏 名：王楚婷

今日はスケジュールが詰まっていた。朝はみずほ銀行を訪れ、中国の銀行と異なる部分を沢山目にした。例えば顧客用窓口は厚いガラスで仕切られることなく、顧客と直接対面する形の対応をしていた。また二階の預金・引き出し等の短時間で済む業務についてはスタンド式の対応で、三階の株式や資産運用といった時間の長い、しっかりした話し合いが必要な業務については座りながらの対応をするなどとても細やかな対応がされていた。こうした細やかさは他にも沢山あり、用紙の記入場所には利便性を高めるため計算機が置かれていた。また銀行の副頭取のお話を聴き、みずほ銀行の日中友好への積極的姿勢や私たちの交流訪問活動への大いなる支援といったことについて強く感じることができた。その後の従業員との交流では、みずほ銀行は人材登用において特に専門分野を重視しているわけではなく、それよりも表現能力を重視しているため、様々な専門分野の人材を集めているとのことであった。これには私自身将来のキャリア構築においてより多くの選択肢が生まれたような気がした。

お昼は松本楼を訪れ、孫中山氏が日本滞在期間中に彼と意気投合した沢山の日本の人々の協力を受け、孫中山氏が亡くなった後も梅屋庄吉氏は孫中山氏の思想や遺志を受け継ぎ、さらに自ら出資し孫中山氏の銅像を4体作り中国各地に寄贈したといったことを知り、日中間の友好の歴史について強く感じることができた。

中国大使館に到着すると帰国をしたような感覚がした。公使の歓迎を受け、私は北京理工大学の代表としてこの数

日間の感想を述べた。その感想を通じて、この数日間があったことを改めて感じ、日本の街や日本という国、訪日代表团、団員そしてホストファミリーの皆との間もなく訪れるお別れへの名残惜しさを感じた。私は今回の旅を忘れない。

日 付：12月4日（月）7日目

大学名：北京理工大学

氏 名：詹天予

午前、私たちはみずほ銀行を訪れた。同銀行の特徴はワンストップ式サービスである。預金・引き出しから資産運用まで全て同じ階で行うことができる。銀行側からはさらに、銀行が行う個人資産保管業務について紹介があり、私たちは金庫の見学を行った。この業務では各顧客は自身の重要な物品を保管することができ、他者はそれを開ける権利はない。金庫はそのサイズにより手数料が異なるが、料金自体はさほど高くはなく、一般の中流家庭が賄える程度である。しかもこの金庫室の外壁は鋼鉄でできていて、地震や火災等のあらゆる自然災害にも耐えられる。こうした点にも日本企業の人間本位の理念が示されている。その後、同銀行の従業員と交流を図り、日本企業の一部中国や欧米とは異なる文化について知った。入社後従業員は共通の研修を受けるため、人材の採用の際日本企業は応募者の専門分野が自社に合っているかについてはさほど重視しない。この期間中、早く企業の文化に馴染めるよう従業員の対人関係を広めている。企業の従業員への福利も充実していて、欧米企業のようなリストラ等の残酷な現象は起きない。但し、配置転換を行い、従業員が各業務のプロセスを理解できるようにしている。私たちと今回交流をした従業員はみずほ銀行で10年近くまたそれ以上勤務しているベテランであった。彼らは企業への強い帰属意識や愛着を持っている。しかしながら、こうしたプレッシャーの比較的少ない業務環境は従業員を現状に満足させ、成長への前向きな姿勢を拒むのではないか、この点については依然として考えなければいけない問題である。

午後、私たちは中央大学を訪れた。中央大学では日本人学生や韓国人留学生と共に自分の両親が年老いた際に自ら面倒を見るか、それとも施設に預けるかというテーマについて討論を行った。異なる国の学生による討論だったが、有意義な討論ができ、私自身思想的そして文化的な刺激を受けることができた。今日は収穫の多い一日であった。今回の活動も終わりが近づいてきた。東京での時間を大切にしたいと思う。

日 付：12月4日（月）7日目

大学名：華北電力大学

氏 名：張楠

今日は訪日活動最終日の前日で、スケジュールが詰まった、また有意義な一日であった。

初めに私たちはみずほ銀行を訪れた。同銀行はみずほ金融研修セミナーの開催以外にも中国の金融界における人材を多く育成しており、さらに中国営業推進部を設けるなど、日本企業の対中投資の支援や中国の関連機関との交流を促進している。みずほ銀行の中国人スタッフとの交流を通じて、私はインフラ建設において銀行の果たす役割や日中両国の異なる国情において、銀行が直面しているチャンスや課題といったものについて知ることができた。私は金融を専攻しているわけではないが、この日の紹介は私にとっての新たな世界の扉を開くもので、金融や私たちの日常生活について新たな認識が得られた。それから私たちは二階や三階の業務フロアさらに金庫室にも入ることができた。そこはまるで映画で見るような感覚がした。

次いで、私たちは日比谷松本楼で昼食をとり、さらに梅屋庄吉氏と孫中山氏との間の革命の故事についてお話を伺った。梅屋庄吉氏は自身の危険を顧みず、常に孫中山氏の革命事業をサポートし、「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」の盟約を守り続け、自身の全財産を孫中山氏の革命事業に捧げた。現在、松本楼の社長や梅屋氏の親族らは依然として先祖の遺志を受け継ぎ、日中友好に尽力している。松本楼にはさらに宋慶齡女史がかつて愛

用したピアノが展示されている。

その後、私たちは中国駐日大使館を訪れ、郭燕公使及び大使館のスタッフと面会した。そして訪日団の6大学の代表者からの発表があり、私は彼らの発言内容から改めて今回の交流活動を振り返り、沢山の新たな視点に気付かされるなど多くの収穫が得られた。質疑応答のコーナーでは、郭燕公使は高級外交官としての思考や対応能力を示し、鋭い問題に対しても完璧な対応をされていた。また郭燕公使からは私たちが日中友好の架け橋となり、祖国の発展ひいてはアジアの平和と発展に寄与してほしい旨のお話があった。

最後に私たちは中央大学を訪れた。そこでは45分間のグループ討論を行い、国情や政策の違いにより、日中両国では就職時に考慮するポイントに大きな違いがあることを知った。例えば日本では収入の格差が比較的小さく、福利面をより重視しているなど、こうした点は日本の現代社会に存在する問題を間接的に反映している。

この日のスケジュールは詰まっていたが、そうした中私たちのお世話をしてくれた関係者の方々にはとても感謝している。収穫が多く、忘れられない一日となった。

日 付： 12月5日 (火) 8日目

大学名： 北京理工大学

氏 名： 王天竹

Finally, time to go.

早朝、スーツケースを手に部屋の入口に立つと、窓の外の草木は青々と茂り、これまでの沢山の出来事が思い返され、今日が最終日だとは信じられなかった。ホテルニューオータニでの三日間、私は三つのレストランでそれぞれ朝食をとったが、そのサービスの素晴らしさは忘れ難いものがあった。出発前、幸いにも同ホテル地下のエコ施設を見学することができた。そこでは汚水の処理率が70%に達している(一企業としてホテルニューオータニは、ゲストのサービスへの要求を満たすと同時に環境への配慮という社会的責任を果たしている)。

離れがたいと思いつつも、歓送会は予定通りに始まった。出迎いの列を作る際、私は敢えて一番前に並んだ。それは「お父さん」に最初に見つけて欲しかったからである。私の「お父さん」は最初に会場を訪れ、私を見かけるとまず初めに私の胃の状態を気遣ってくれた。実は私はこの時からすでに涙をずっと堪えていたが、私たちが国歌を歌った時には堪えきれずに涙が溢れ、しっかり歌うことができなかった。中国と日本の関係は微妙で、私たちには多くの政治的そして歴史的なわだかまりが存在する。しかし今この時、私たちには何の違ひもなかった。私たちは異なる言語を話し、異なる背景を有しているが、今この時、私たちは共通の素晴らしい思い出を持ち、心の中には愛や寛容さがあり、私たちは固定観念を超越し互いを祝福していた。

また会いましょうと言いつつも、今回のお別れ以降、私たちは遠く隔てられ、再会はとても難しいことは分かっていた。私は何度も振り返り、そして手を振り、今回の素晴らしい思い出をしっかりと脳に刻んだ。私は飛行機の中でこの文章を書いていたが、また目頭が熱くなってしまった。さようなら日本、さようなら私のホストファミリー、私は「互いにどれだけ離れていても、いつかまた再会できる」ことを信じている。

日 付： 12月5日 (火) 8日目

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 馬惠琳

今日は私たちの活動の最終日で、皆は互いにホームステイの際の状況を語り合っていた。私は昨日の時点でもう柏村さん一家を名残惜しく感じていた。彼らは皆仕事や勉強に忙しい中、今回週末の時間を使い最大限私をもてなしてくれたことに、私はとても感動した。ホームステイ生活は一生忘れられないものになった。帰国の途にある今、それらを思い起こすと目頭が熱くなってしまふ。感激や感動が交わった気持ちであった。この日の歓送会には彼らは来られ

なかったが、私は内心彼らが来られなかったことへの多少の安堵があった。もし彼らが来ていたら私はきっと自分の気持ちを抑えることができなかつただろう。歓送会では訪日団団長や日本商会、中国駐日大使館の代表者から挨拶があり、私たち各大学の代表者もそれぞれの感想を述べた。日本語を専攻する大学三年生の私は、今回日本を訪れ依然として自分の日本語のレベルが不十分だと何度も思われた。自分の言いたい事を流暢にすべて伝えられず、総括の時間も短かった。原稿を事前にも書いていても、壇上に立ち発表する際には知らぬ間に原稿の内容とかけ離れてしまった。

歓送会で私たちは『違いはない』の合唱を披露した。歌っている際、その場の雰囲気良かったのか、思わず自分の高校時代と現在の自分を思い起こし、またホストファミリーからのおもてなしに思いを馳せ、色々な思いが交錯し、自分自身これまで以上に勉学に励まなければと思った。国と国との関係は実際に人と人との関係に似ている部分が多く、互いに真摯に向き合い、そして理解し合い交流すれば、ホームステイ同様たとえわずか二日間の時間でも人の一生に影響を与えることができるのである。ましてや日中両国は長い付き合いがあり、私たち言語を学ぶ人間から交流や理解を始めることで、日中の友好に大きく貢献できると信じている。

日 付：12月5日(火) 8日目

大学名：華北電力大学

氏 名：宇文天悦

今日は日本での最終日である。私たちはこの数日間宿泊したホテルニューオータニのエコ施設を最後に見学した。同ホテルはエコ対策が素晴らしかった。快適なホテルで優れたサービスを受けると同時に、私は常々同ホテルは如何にして優れたサービスの提供と同時に省エネや環境保全対策をしているのだろうと思っていたが、今日の見学でその方法が分かった。まずホテルニューオータニの地下三階には独自の発電設備があり、この発電設備は電力の供給と同時に水蒸気を生み出し、水蒸気は加熱に利用され、エネルギーの利用度合を高めている。またホテル内の多くの厨房から生まれる大量の廃水や生ゴミも処理の後に再利用されている。現在多くのゴミ処理工場では専門的に回収利用をしていることを知っているが、ホテルの地下にこれほど多くの処理施設があるのには驚かされた。厨房廃水は処理の後、ホテル内の庭園への灌水やトイレに使われ、生ゴミは有機肥料としてホテル内の植物に使われたり農家に提供されたりするなど、ホテルニューオータニではリサイクルによる環境保全を実現している。

ホテルの見学の後、お昼に私たちは歓送会へ参加をした。充実した8日間のスケジュールはあっという間に終わり、日本訪問も終わりの時が近づいていた。しかしこの8日間の出来事を思い返すと、本当に多くのことを学び、悟ることができた長い旅だと感じ、学んだ沢山の知識や見聞についてはじっくりと吸収する必要があると思った。このような日本の有名企業や大学への訪問、そして学生や企業の従業員またホストファミリーとの交流による相互理解といった貴重な機会が得られたことにとっても感謝している。歓送会の席上では訪問先企業の従業員や沢山のホストファミリーの姿を見かけ、皆は国歌を歌い、私は彼らからのこの数日間の指導やサポートに心から感謝をした。私は今回、知識や文化そして習わし等様々な面で多くの収穫を得ることができた。

日 付：12月5日(火) 8日目

大学名：国際関係学院

氏 名：査懿童

時間が経つのは早いもので、8日間はあっという間に過ぎてしまった。ホテルニューオータニで最後の朝食を済ませ、私たちは同ホテルのスタッフの引率の下、エコ施設の見学をした。仮にこれほど大きなホテルにおいて資源の再利用がされなければ、それは多くの資源の浪費につながる。ゲストに素晴らしい宿泊環境を提供すると同時に環境対策を行うのが、真に優れたホテルだと言える。

午後には日本を離れなければならない。歓送会では沢山のホストファミリーが多忙の中私たちの見送りに来てくれた。私たちが総括をしている時には、その様子を写真に撮ったり拍手をしたりと、まるで私たちは彼らの子どものようにあった。私のホストファミリーは仕事の関係で歓送会には来られなかったが、彼らにはとてもお世話になった。わずかな間だったが、本当の家族のような気分が得られた。お別れの時はやはり訪れ、ホストファミリーの方々は私たちをバスの下まで見送り、その時多くの団員は涙を見せていた。私は、自分も泣いてしまうことを恐れて歩を速めた。これが縁という物なのだろう。山内さんは歓送会に来られなかったが、私は彼ら一家の幸福と健康、そして葉子さんと洋平さんが仲睦まじく、まだ喋れない楓子さんが早く大きくなり、元気で綺麗な女の子になることを願っている。その時あなたは自分が1歳の頃に、中国の女の子が家に来たことをかすかに覚えているかもしれない。